異常残酷ミステリー

断頭台

山村 正夫

カイガイ・ノベルス

異常残酷ミステリー

断頭台

山村正夫 © 1977

発行者　福田悦夫

発行所　株式会社 カイガイ 出版部

大阪府吹田市広芝町5－30　〒564　TEL 06(385)4407

東京都中央区日本橋小舟町1－1 新江戸橋ビル　TEL 03(662)8786

振替　大阪 19993

印刷　ナニワ印刷株式会社

落丁・乱丁本は本社でお取替いたします。

0293－5006－1096

断頭台

山村正夫

異常残酷ミステリー

KK カイガイ 出版部

目次

断頭台 7
女雛 35
ノスタルジア 65
免罪符 97
短剣 127
天使 155
対談・森村誠一 VS 山村正夫 217

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

カバーイラスト…亀井なおみ

断頭台

断頭台

――狂気こそ真の逃走にほかならない――

1

熊倉左京太は、劇団仮面座の若手俳優である。一風変わった古めかしい名前なのでいかにも名優のように見えるが、その実まったく無名の三文役者にすぎなかった。劇団内でもこのうえもなく冷遇されていて、いままで本公演、試演会を通じて通行人以上の役らしい役のついたことはなかった。

〈仮面座〉は数多い新劇団のなかでも中堅どころにあり、前衛的なレパートリーを次々と上演するのを売物にしている。年に二本の翻訳劇、一本の創作劇と――劇団の文芸部、経営部に人材がいて、問題作を矢つぎ早にぶっけるから、一公演ごとに人気が出て、常打ち劇場のD生命ホールは、いつも客が満員にならなかったことはない。それだけに俳優もわりかた粒が揃っているのだが、左京太だけは別であった。劇団員連名の演技部のなかに、ただ体裁上名前を連ねているだけで、演出部の連中からは、「あいつは柄ばかりで大根役者だからな」と頭から問題にされていなかった。

仲間の俳優たちがどしどし大役を振られて、はなばなしく舞台の脚光を浴び、ラジオ、テレビ界のタレントとしても、目ざましく進出していくのにひきかえて、かれ一人は取り残されたように、裏方の手伝いばかりさせられていた。大道具の職人にまで、「左京太、左京太」と呼び捨てにされる。それでも芝居が飯より好きだから、不平一ついわずに黙々としてよく働くので、お情けで籍を抜かずに置いてもらっているようなものだった。

そんな冷遇を受けていたのは、かれのセリフにひどい東北なまりがあり、役者としてどうにも使いものにならない不器用なせいもあるにはあったが、性格が妙に陰気すぎて劇団内の空気にそぐわないところから、芝居に大切なアンサンブルが、かれのおかげでこわされてしまうおそれがあるので、敬遠されていたためもあった。

かれはふだん稽古場に出てきても、隅の方に積みあげた大道具のがらくたの間にうずくまるようにすわって、

刑事が張込みでもしているような胡乱な眼つきで、稽古の進行を見まもっているのだ。必要な用件以外はだれとも喋ろうとはしない。読み合わせのさいたまに演出家から卜書を読むようたのまれても、黄色い歯のあいだから空気の洩れたような声で、つっかえつっかえ読む。影が薄いから死神という綽名をつけられていたが、そう言われてもしかたがないほど暗い表情だった。一度などは出番が来て、楽屋から舞台へ上がりかけた女優の一人が、うす暗いハリモノの陰からいきなりぬっと、裏方の恰好で出てきた左京太を見て、危うく卒倒しかけたこともあったほどだ。

しかも、どこかからだに欠陥でもあるらしく、頬は病的にげっそりと痩せこけ、落ちくぼんだ眼ばかりが鉛色ににぶく光っていて、おまけに額が武士の月代のように禿げあがり、両側の鬢に申しわけ程度の薄い髪があるだけときているから、なおさら、若さというものが感じられなかった。年は三十二歳ともいうし三十五歳ともいうし、正確なことは誰も知らない。現在の境遇はどんなふうで、劇団へはいる前はどんな生活をしていたのか？かれに関しての履歴もまったくの謎になっている。

それをある程度知っているのは、劇団研究生の城戸鴇子ぐらいのものだった。

いったい左京太のどこに魅力を感じたのか、鴇子がかれといっしょになると公表したときは、劇団中のものがあっといった。人一倍美人で、ゆくゆくは〈仮面座〉のトップスターになるだろうと、演出部内でもひそかに期待をもっていた勘のいい女優だけに、彼女の気まぐれをたれもがとがめた。左京太は鴇子にからかわれているのだと、まことしやかに噂するものもいた。しかし、彼女の左京太に対する愛情は不真面目でもなんでもなかった。むしろ献身的なくらいだった。

「だって気の毒よ。左京太さんはあの若さで戦犯だったんですもの。少年航空兵でラバウルの特攻隊員だったんですって。……死刑の判決を受けて、あちらの刑務所に二年間も収容されていたのが、無実だとわかって奇跡的に釈放されたんだというわ」

なんでも基地にいるとき、濠州兵の捕虜の首を日本刀で刎ねて、処刑した疑いによるものだった、と鴇子はムキになって代弁した。彼女の父親の陸軍大佐も戦犯として刑死しているので、そんな共通点が二人を結びつけたらしい。そういわれてみるとなるほどと、左京太の性格の極度に陰鬱なわけを、だれもが納得したものの、それ

以来よけいかれを気味悪がって近づくものはなくなった。
経歴といい性格といい、芝居の世界に間違って飛び込んできた人間としか思えなかった。鴇子だけが、「でも左京太さんは、そのうちにきっと素晴らしい俳優になれると思うわ。あれほど人にできない苦労をしてきたんですもの。性格俳優としてみんなの見なおす日がきっとくるに違いないわ」と信じこんでいたが、そういう彼女自身かれのすべてを知っているわけではない。むしろ彼女にすら秘密にしていることの方が多く、かれはふしぎと過去のことについて触れられるのを嫌がった。ふだん黙々として、何を考えているのかも鴇子にはわからなかった。

その左京太に、とつぜん役がついたのである。
その年の秋の公演は、文芸部員の一人が書きおろした、四幕物の野心的な創作劇『断頭台』を上演することに決まり、なかに出てくる死刑執行吏サンソンの役に、かれは抜擢されたのであった。鴇子はわが事のように喜んだが、それは何も演出部が彼女の切なる願いを聞きいれたからでもなく、特別にかれを見なおしたせいでもなかった。『断頭台』がフランス革命を背景にした芝居で、登場人物がやたらに多く、劇団員が総出演しても、まだ役者が不足するので、やむなくそうせざるをえなくなっただけの話だった。——それに、陰惨な風貌の首斬役人という柄の上の注文からいうと、かれのほかにふさわしい俳優がいなかったからでもある。確かに柄の点だけ見れば、かれ以上の適役者はいなかった。
「どうせあまり重要な役じゃないんだ。演技上多少の見劣りがあっても、眼をつぶるさ」
演出家はさいしょから、見くびった割りきりかたをしていた。
しかし、いざ稽古にはいって読み合わせにかかってみると、当の演出家の方がたじたじとなった。
左京太のその役に対する打ち込み方には、いままでかつて見なかったほどの、異様な真剣さがこもっていたのである。人の嫌がる役が逆にかれの情熱をかきたてたのか——それともこのチャンスをのがすまいとする必死の意気込みからか、ここ何年というもの、かれの裏方姿しか知らなかった他の俳優たちは、ギョッとして顔を見合わせた。いや、それより台本を手にしたかれの姿に何かしら肌寒いものを感じたという方が当たっていた。鴇子にしてもまるで真剣勝負でもするような、そんなひたむきなかれを見たことがなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

セリフにしてわずか数言——四幕目の幕切れの処刑の場面に顔を出すだけの人目をひかない役だというのに、まるでその役と心中でもしかねまじき、取り組み方なのである。

ふつう、よほどヴェテランの新劇俳優でも、舞台上で完全に役の人間になりきるためには、相当な期間の稽古を必要とする。だからこそ俳優は、演出者を媒介にして、役の心理、性格を自分のものにするために骨身を削る思いをするものだが、それも役に応じての程度問題だった。その他大勢に類する端役を演じるのに、左京太ほどの異常な熱意を示したものはだれ一人としてなかった。

「あいつは生まれてはじめてプログラムに名前が載るんで、のぼせやがったんだぜ」

「いや、役が役なんで、打ち込み方も違うのさ」

仲間の俳優はてんでにそんな憎まれ口をきいたが、左京太はひとり黙々として取り合おうともしなかった。のみならずかれらが、舞台監督からガミガミいわれるまでは稽古時間も遅れがちなのにひきかえて、一時間も前からきちんと稽古場へ現われる。台本もすでに百回以上も読み返している。セリフも他人の分まで諳じてしまう。そればかりではない。シュテファン・ツワイクの歴史作品のほか、フランス革命に関するありとあらゆる文献を古本屋や図書館で捜し出してきて調べる。古今東西の死刑執行吏の伝記を読む。ギロチンの模型まで自分の手でつくってみる。そのうえふだん無口なかれには珍しく、演出家に執拗な質問を繰り返した。

「いいんだよ。何もそんなに大げさに考えなくても、ただ暗い冷酷な感じを出してくれれば、それでいいんだ。君の地のままでやってくれてかまわないんだよ」

演出家は、かれ自身の演出プランに従って、やや皮肉にそう答えるほかはない。

しかし、左京太はそんな生半可な答えでは納得しなかった。かれは老人のようなダミ声でなおもしつっこく訊く。サンソンの暗い冷酷な性格はどういうところに原因があるのか？　サンソンとはいったいどういう人間で、なぜ刑吏などになったのか？——そうなると、演出家の方はぐっとつまった。いや自尊心を傷つけられていらだった。

だいたい作者がそこまでは書いてないのである。何十人と出てくる登場人物のなかで、そんな傍系人物の説明にまで、いちいち神経を使っていたらきりがないからだった。

「それは、君の方で勝手に推測してくれたまえ。僕の方では、前歴はともかく、台本にあるような冷酷な刑吏になってくれれば、それでいいんだから……」

演技の初歩もろくにできないくせに、生意気なことをいうなとばかり、しまいには感情的な口調でつきはなされて、左京太は世にも悲しそうな顔になった。というよりその顔は日一日と苦脳で彩られていった。だれの眼にもかれが俳優としての技量、俳優としての追及の限界を越えて、サンソンという役に立ちむかっているのだということが、ありありわかってきた。

「あなたは少しノイローゼになりすぎているわ。役者の良心として、そりゃああなたの態度は、立派には違いないけど、そんなにとことんまで追及してたら、頭の方がどうかしてしまうわよ」

今度の芝居では、酒場の女ジルダを演ることになっている鴇子が一番心配して注意したが、いつもは彼女のいうことならなんでもすなおに聞く左京太が、別人のように耳を貸そうとはしなかった。

それどころか、まだ立稽古にもはいらないうちから、化粧前にむかってメーキャップをあれこれと苦心してみる。人の寝しずまった深夜に起き出して、ドーランを顔にべたべたと塗りたくるのである。髪の毛もオキシフルで赤茶色に染める。ある日、夜中にゴソゴソと起き出したかれが、口中を血だらけにしてナイフと釘抜きで歯を抜こうとしているのを発見して、鴇子はまっ青になってとめたことさえあった。

明けても暮れても——ときには彼女の存在すらも忘れてしまうほど、かれはサンソンの幻影に取り憑かれてしまっていた。左京太と呼ばれたのでは、返事もしなくなった。眠っているときでも、サンソンとかギロチンとかいう言葉が譫言のなかにまじっていた。夢と現実との区別がつかないくらい、かれの脳裏でかれ自身とサンソンとが混同されているように見えた。

——それは、いよいよ明日で最後の立稽古がおわり、明後日には待ちに待った初日があくという日のことであった。

2

風が颯々と砂塵を巻いて吹き出している。影絵のように黒々とした影を落として聳え立つ、不吉な二本の柱の

あいだで、茜色の空はようやく血に飽きて黄昏れはじめた。広場を喧騒と怒号とでうずめていた群集たちも、はやちりぢりになって影もない。鼓笛隊を先頭にした兵士たちの靴音も遠のいた。

後には処刑台の周囲を警護する何名かの憲兵と慌てて店じまいに取りかかった胡桃売り、レモネード売りなどの屋台の大道商人たち、そして自由の女神の巨大な石像が残るばかりである。その石像は、夕靄のかなたのチュルリー宮に背を向けて、革命の象徴の、真紅のフリージャ帽をかぶせられている。彼女が置かれた場所は、かつてルイ十五世の記念碑が立っていたところであった。

「革命裁判所万歳！」

そのとき、処刑台の上で、まだ縄の端を握ったままぼんやり佇んでいた刑吏サンソンの唇から、低いしゃがれた呟き声が洩れた。

その声は、つい半時ほど前、血に狂った群集たちが感きわまって鋤や鍬をふりあげ、口々に絶叫したのとは違って、ゾッとするほど陰々として、呪文でもくちずさんだかのように聞こえる。

それはかれの姿が全身黒ずくめで、魔法使に似た三角頭巾、だぶだぶの釣鐘マントですっぽり全身をおおっているせいばかりではない。軍鶏のようにするどい眼と、顴骨の思いきりとがった死神のような横顔とが、何かに憑かれているような奇異な感じを与えたからである。

かれはかたわらの相棒から、「おい兄貴……」と促されると、やおら蒼白な顔をふりむけ、握った縄に骨ばった腕をそえて、力いっぱいひきあげた。

「いつもながら、なんて重てえんだ」

滑車はあっても、縄の先端の三角に磨ぎすまされた刃を、軛の上までひきあげるには、満身の力を必要とするのだ。

「だ、台に流れた血が、刃の先に膠のようにくっついて離れやがらねえ」

「そりゃ、たっぷり怨みがこもってるからよ。今日のように往生ぎわの悪い御婦人だと、なおさらだぜ。桑原、桑原……」

相棒のジルベルトは刑吏に似合わぬ臆病者と見えて、柱の向こう側から歯の根も合わぬ慄え声でいった。――かれの足許には、どす黒い色をした柳の小籠が据えてある。

なかには斬り落とされてまだまもない犠牲者の首が、おびただしい血汐を吸った鋸屑に半面をうずめて、果物

のようにころがっていた。それは若く美貌の貴婦人の首だった。白蠟のような生白い色の頬から金髪の巻毛にかけて、血がべっとりとこびりついている。切断された瞬間に、強く唇を噛みしめたのであろう。紫色に変色した唇からも、糸のような血がしたたり落ち、無念の形相はすさまじかった。

その凄惨な生首を――ジルベルトはおっかなびっくり、金髪をわしづかみにして宙にぶらさげると、眼をそむけるようにして、台の下の手押車のなかに投げいれた。

「まったく手こずらせやがったぜ。おれはどうも女は苦手でいけねえや」

「しかし、わ、若い女を殺っつけたのは久しぶりだったな」

サンソンは吃るように、かすれた声でいうと、

「ヴェルサイユ王宮の式典長官、ド・オリヴァー公爵夫人とかいったっけ」

「そうよ。公爵の方なら二週間も前にあの世へお送り申し上げたじゃねえか。兄貴の膝にすがりついて、一目女房に会わせてくれろ、とわめくやつをな……。兄貴、何かかかわりあいでもあったのかい？」

「いや、そ、そうじゃねえ。そんなことじゃねえんだ」

口のうちでもぐもぐいってから、サンソンはふ、ふ、ふ、と含み笑いをした。

「貴婦人と名がつきゃあ、どこのだれだってかまやしねえのよ、若い女の、く、首がばっさり落ちるのをこの手で感じると、おれはからだじゅうの血がゾクゾクしてきやがるんだ。……み、みんなあいつが、ここへ送られてくる日までの小手調べっていう気がしてな。……ふ、ふ、ふ、それも後二日の辛抱だが……」

「後二日だって？　何が……」

「おれが四年間待ちに待った日がやってくるのがよ。おれはその日が来るのを、どれほど待ちこがれていたかしれやしねえ。……あの高慢ちきなオーストリア女が、今日の貴婦人みてえに、土壇場で見苦しくじたばたしやがるだろうかと、思ってみるだけでも、うっとりとしてくるんだ」

ジルベルトが思わずギョッとして見なおしたほど、かれの眼は酔ったように妖しくかがやいていた。

しかもその眼で、台の上の首のない女の胴体をなめまわすようにしていうのだから、なおいっそう鬼気迫るものがあった。闇は刻一刻と深くなったが、サンソンの頭のなかには、いましがたおわったばかりの血みどろな処

刑の情景が、白日夢のようにまだありありとこびりついていて、その生々しい一齣一齣がかれの官能を異様にかきたてるらしいのだ。……

——今日の女、オリヴァー公爵夫人は、護送車から降りて、断頭台のさいしょの一段に足をかけたとき、恐怖のあまり気を失った。サンソンが担ぎあげて処刑しようとすると、いきりたった群衆が怒号した。

「眼をさまさせてから、ギロチンにかけろ！　罪の償いを最後の瞬間まで、思い知らせてやらなけりゃ、見せしめにはならないぞ」

その声に応じて、すぐさま憲兵が駆け寄ると、皮鞭で夫人を思いきり打ちのめした。

苦痛に意識を取りもどした夫人が、眼前にのしかかる断頭台の重圧に半狂乱になったところを、ジルベルトに手伝わせて、無理やりひきずりあげ、ふたたび失神しかかる一歩手前で、一挙にそのかぼそい首を刎ねたのであった。

「兄貴って、じっさい気味の悪い男だぜ。おれたち首斬役人のなかでも、特に変わり者だってことは知ってたが……やっぱり何かあったんだな。……それで、兄貴の待ちこがれているその女ってえのは、いったいどこの何さまなんでえ。兄貴がそうもったいつけるからには、よほどの上玉なんだろうが……」

少々頭の足りないジルベルトは、首をひねったぐらいでは見当もつかないらしい。

「ふ、ふ、ふ、知りてえか。……そうか。じゃあ、教えてやろう」

サンソンは興奮を押えかねた熱っぽい口調で、舌なめずりをしながら、

「今日は、何日だったっけな？」

「いやだぜ。兄貴、十月十四日に決まってるじゃねえか」

「そうだ。その十月十四日……革命裁判所検事フーキエ・タンヴィルは、コンシェルジュリー獄に投獄中の一囚人を、反逆罪、内乱罪、国費乱費、皇太子との近親相姦等の破廉恥罪で起訴した。陪審員の評決は明後日行なわれるが、判決状はすでに作成されていて、死刑……そして、明後日の十月十六日——すなわち一千七百九十三年十月十六日は……」

「その日は……」

「革命史上永遠に残る記念すべき日になるだろうぜ。——女帝マリア・テレサの娘、ルイ十六世の王妃マリー・

アントアネット・ド・フランスがこの断頭台にむかって送られてくる！」

3

ジルベルトはサンソンの前歴を知らない。

もともと首斬役人などというものは、きわめて身分が卑しく、いずれもいかがわしい前身のものに決まっているから、詮索する必要もないためで、サンソンが、刑吏になる前、バスチーユの牢獄に四年間もつながれていた囚人だったという以外、仲間のうちでも、知ってるものはだれもいない。まして釘抜きと焼鏝で容貌を変え、言葉つきまですっかり刑吏になりきっているサンソンが、もとをただせればれっきとした由緒ある貴族で、男爵だったと知ったら、ジルベルトでなくとも眼をまわすものがほとんどであったろう。

――数年前にさかのぼる……イルロード・ダンティニャック・ド・サンソンは、凛々しい軍服に身を包んだ、トリアノン宮警護の近衛隊長であった。

トリアノン宮は、当時王妃マリー・アントアネットが、国の疲幣をよそに、国庫から百六十四万九千五百二十九リーブルの巨額の金を支出させて、改築した快楽の館である。

謁見室の金の鏡板や、玻璃の華飾。ワットーやペーターの絵をはじめ、十八世紀の選り抜きの芸術作品を収集した客間など、古代ギリシャの素朴な線とフランスの優美とを結合した、ロココ建築の粋ともいうべきその離宮は、ルイ十六世の住むヴェルサイユ王宮からかなり離れたところにあり、それをいいことにした軽佻浮薄な王妃は、ここに取り巻きの若い貴族をおおぜい集めて、連日のように仮装舞踏会を催したり、徹宵の宴を張ったりしたのであった。

サンソンははじめ王から警護の任務を命じられたときは、内心で苦々しい思いがしたが、ひとたび王妃の身近に伺候して、彼女の類いまれな美貌に接すると、たちまち魂を奪われた。当時の貴婦人の典型ともいうべき優美典雅な容姿が、無骨で純情な一青年将校の心をいかにかきみだしたかは、容易に想像できることだった。サンソンは王妃の側近の列に加えられた栄誉に、どれほど感激したかしれなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb